

小樽にはどんな人が集まってきたの？

明治政府は、本州方面から北海道へ移動する制限をなくしました。小樽で成功したいと夢を持って移り住んだ人も多く、小樽商人や職人も増えていきました。北海道の開拓に代わってはない港まちだった小樽は、そのころ、札幌より人口が多く、北海道で使うお金の取り引きをする銀行もたくさんできました。

◆港にはどんな仕事があったの？

港で働く人は、船の乗組員だけではありません。貨物船の荷物の積みおろしをする人、荷物を小舟で岸まで運ぶ人、小舟の荷物を陸にあげ倉庫へ入れる人、乗組員や乗客を小舟で送迎する人、水先案内人や荷物を管理する人など、さまざまな仕事がありました。

◆石造りの倉庫をつくったのは？

北前船の船主たちは、北海道で売るための酒、米、塩、さとう、衣類、紙などをはじめ、小樽から

出荷する道内各地の農産物を一時的に保管できる石造りの倉庫を建て、たくさんの商品をあずかっていました。内側の柱や梁は木材で、外壁は札幌や小樽でとれる軟石が使われ、夏は涼しく、冬は暖かく、防火性にも優れています。



明治時代の小樽倉庫群 (小樽市総合博物館所蔵)

◆さまざまな職人がいた坂道

小樽には「職人坂」とよばれる坂があり、昔は両脇に仏壇、家具、建具、塗師、金具師など、さまざまな職人の仕事場が並んでいました。また、入船町周辺は、縫製工場や織維問屋など、織維産業が盛んな地域でした。漁をする網の目印となるガラス製の「うき玉」も、小樽のガラス職人の技から生まれています。



ガラスのうき玉

もっと知りたい！「小樽建物図鑑」

小樽の印

小樽運河沿いの倉庫群を観察してみると、外壁にマークのようなものがあります。これは、店を見分けるための「印」です。のれん、働く人が着る半てん、道具にも入っていました。「いじるし」、「やまいち」、「りゅうご」、「いちうろこ」など、いろいろな印を見比べながら、まち歩きを楽しみましょう。



「やまいち」の印がある旧大家倉庫

国指定重要文化財 「旧日本郵船株式会社小樽支店」

1906（明治39）年に建てられた旧日本郵船株式会社小樽支店。海運業が栄えていた時代を物語る商都小樽を代表する文化遺産です。「小樽の歩みと日本郵船」をテーマに、明治・大正期の海運を中心とした小樽の発展と日本郵船に関する資料を展示しています。



※保存修理工事のため、2022年3月まで休館予定(期間が変更になる場合があります)

